

三月二十九日

昨夕、淡路島の山田脩二と久し振りに話した。一宮町も市町村合併で淡路市とやらになるそう。山口勝弘先生の世界環境芸術祭の持続もおぼつかなくなるだろうとの事。一宮のいざなぎの丘に建てた淡路山勝工場の存続も危惧されている。一宮町と山口勝弘とは山口さん一代限りの契約で土地を貸与していたと言っから、その後の事はあんまり希望は持てない。むしろ最悪の事態を想定しておいた方が良さだろう。多摩プラーザでリハビリに、そして体をいやす床にある山口勝弘はどこ迄知っておられるか。文化芸術と言う「分野」としか言いよの無い世界のもろさを痛感せざるを得ない。はなから公共のギャラリーにしてあげれば良かったというのは正しくない。世にある公共施設としてのギャラリーの悲惨さを山口勝弘は知り尽くしていた。

山口勝弘の芸術はテクノロジーの進歩とも連動していた。それ故、何もモノが無くなっても記憶を残す事は可能だ。コンピューターにアーカイブを構築すれば良いという考えもあるだろう。しかし、それでは一番大事な何かを残せない。その何かとは、その人間が生きて、動き、精神を飛躍させた空間の総体を残す事ができない。コンピューターの画面には奥行き、すなわち距離が存在しない。距離が空間をつくる。そして人間はそんな空間から意識、無意識を問わず、常に大小のインスピレーションを受けている。そのインスピレーションの一部が集積したのを記憶と呼んでいるのかも知れない。一人の人間の記憶は自然の力と同じような意味

を持っている。

山口勝弘は長い間教育者でもあった。教え子が沢山居るんだと誇りにもされている。お弟子さん達はこの事を知っているのだろうか。知っても仕方ない事だろうが、少しは動くべし。芸術家は、要するに芸者だと言われる現実を壁として視る為にも。

午前中世田谷村にて休養。

十四時半研究室。OG向井来室。柴原も来室したので丁度ヨシと野本君の送別会を十七時より。大昔、渡辺保忠先生が数々の別れに際して井伏鱒二訳の「花に嵐のたとえもあるさ、さよならだけが人生だ」と酔ってつぶやいていた。それ程大仰な事でもないが、人が居なくなるって事はそれなりに重い。